

氏 名	谷 川 冬 二
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5039 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	アイルランド観の再構築 ―自由を求めるアイルランド詩人たち― (Re-writing Irelands: Irish Poets' Search for the Idea of Liberty)
論文審査委員	主 査 教 授 山 崎 弘 行 副 査 教 授 市 川 美香子 副 査 教 授 荒 木 映 子

論 文 内 容 の 要 旨

序章「綴られてきたアイルランド」を、まず、アイルランドにおいては、正当なアイルランドの歴史とは何かをめぐって、とりわけチューダー朝以降、数々の言説が、政治家、歴史家、そして詩人によって実生活に照らして検証されてきたので、その改訂を読み解くことが、近現代を考察するうえで非常に示唆的である、と説き起こした。ついで、イングランド対アイルランドという図式に帰せられる対立的思考が、歌謡などによって伝承される過去のイメージによって維持・強化されるが、これには、アイルランドで使用されていたケルト系の言語であるアイルランド語がイングランドの植民地政策によって19世紀のわずか100年間にほとんど失われたという事情が深く関わっている、と指摘した。アイルランド語の伝承歌が失われて、共同体の過去が失われた。その空白に、強制されて心ならずも使用する英語への好悪相反する感情や、支配国イングランドへのあからさまな敵意が忍び込む、と説明した。論述の流れは、だからこそアイルランド観を述べた歴史物語の生成過程、すなわち無数のモチーフの取捨選択の仕方とその継ぎ合わせかたが注目に値する、と続く。物語的なモチーフを組み合わせて得る歴史理解は類型化を避けられないが、これは、同時に、モチーフの組み換えによって、アイルランド観を改め得る可能性があることを示唆している、と主張した。

第一章「アイルランド的コンテクスト」では、序章を踏まえて、アイルランド観を改めるべく、過去の膨大なアイルランド関連文書を読み直すことを試みた『フィールド・デイ・アンソロジー』の周辺に焦点をあてた。アイルランドの英語化が進んだ現代の視点から、啓蒙化が最も進んだイングランド対蒙昧の民の国アイルランド。このような類型化とそれに対する反発のなかで生み出された膨大なアイルランド関連文書の編集過程が、リベラル・ヒューマンイズムの価値をめぐる論争となって展開された点に、注目した。リベラル・ヒューマンイズムでは、国家、教会から自立した自由な個人の価値を重くみる。その中心には、選択する意思と能力の肯定があり、ここに国の姿を示すのはその住人だという考え方が生まれる。いっぽう、アイルランドで最も強力な教会はカトリック教会であり、国家や共同体のありかたに大きな影響を及ぼしてきた。これらを前提に、『フィールド・デイ・アンソロジー』を出版した劇団フィールド・デイの劇作品『トランスレイションズ』や800年にわたるイングランドとアイルランドの軋轢を取り上げ、個人の啓蒙的知性が国家の是に左右されやすいことや、また、19世紀末の時点ですでに、アイルランド人が野蛮であるという俗説が、イングランドではより「科学的」になって強化され、「ケルト対サクソン」という類型的な対立軸が既成化していた、と指摘した。あわせて、アイルランドでも対立が類型化しており、イングランドに対する反発から生まれる民族意識から、18世紀末のアイルランドを形成していた文化的多様性に対する敬意が脱落していたことを指摘した。

第二章「ケルト的アイルランドという言説」では、まず、イングランドの詩人マッシュー・アーノルドの『ケルト文学研究』を19世紀末当時のアイルランドにおける政治文化的文脈から読み直し、アイルランドの詩人W. B.

イエイツによるその反駁と改訂の実相を精査している。

アーノルドは、ブリテン諸島のケルト人たちが戦いに敗れ続けてきたことを強調しながらも、彼らの精神性がイングランドの文学に類例のない美質を与えたとして称揚している。イングランド人が持つゲルマン的短所として退屈、平凡と列挙しながら、彼らの産業が進んでいることを認めている。これらを総合して、アーノルドの『ケルト文学研究』は、純粋な文学研究の書ではなく、ケルトの文学研究にこと寄せてオックスフォード周辺に暮らすイングランドの知的階級、およびアイルランド人に宛てた、きわめて政治的な訴えかけだという結論を得た。

イエイツの反論は、センチメンタルで自然に近いケルト人と理法に明るく技術に秀でたイングランド人というアーノルドの対比を否定する。ケルト人、なかでもアイルランド人を未開とし、啓蒙されるべき、育てられるべき存在とする根拠になるからである。イエイツは、アーノルドがイングランド文学への賜物として述べたケルト人の自然愛好をイングランド人もかつては受け継いでいた古代宗教の名残とした。また、アーノルドがケルト系の人間の特徴とするセンチメンタリズムを都会の人間のみ当てはまる属性であって、本来のアイルランド人は「むき出しの事実 (“bare facts”）」を好むとした。

イエイツはアーノルドのすべてに反対しているわけではない。中産階級の俗物主義を牽制し、想像力の復権を願う点でイエイツはアーノルドと共闘できたし、ともに18世紀末に起きたユナイテッド・アイリッシュメンによる武装蜂起、いわゆる1798年蜂起の再発を恐れていた。結果として生まれたのが、イエイツ流のケルト言説である。それは、アーノルドの言うケルト民族のナチュラル・マジックに始原というニュアンスを与えて、それを過去と現在の同時的存在という歴史的時間的な概念に転換し、そこに「小作農階級 (“peasantry”）」という人々が生きるのを見て、「私たちアイルランド人 (“We Irish”）」を主体にアイルランド側から語るものである、というのが第二章前半部の結論である。

第二章の後半部では、このイエイツのケルト論の背景として、1798年蜂起に着目した。19世紀後半、民族主義の高揚とともに好戦的なバラッドが歴史書の代用をしていたアイルランドでは、アーノルドのケルト論の常套句である「事実の専制 (“the despotism of fact”）」がアイルランドの植民地状態の容認を求めるものと受け取られ反発されると推察するいっぽう、イエイツが、おそらくは19世紀前半イングランドのチャーティスト運動までも視野に入れて、民族主義的なバラッドのテーマとして好まれていた1798年蜂起の語り変えを試みていたことを明らかにした。すなわち、蜂起の参加者を安易に英雄として賛美せず、戦いの悲惨を取り上げて、武力に訴えない民族主義を模索していたことを明らかにした。アイルランドという国家の独立を目指して武力をたのむのは、都市で暮らすカトリックの中産階級による理念的でセンチメンタルな民族主義であり、多数を占める農村部の小共同体に属する者たちの心性は大いに異なる、というのがイエイツの立場である。彼にとっては後者こそ本来のアイルランド人であり、彼らを主役として記述するためにイエイツが用意したのが、「ケルト」という名で結ばれた民族が共有できる想像上の故郷アイルランドであって、それは始原に連なる宗教性と穏やかで詩的な精神を特徴とする、と述べた。イエイツは、アーノルドのケルト論に必要な反駁を加えつつ、自国民の自国に対する見方を変えようと試みた、と要約できる。

第三章「国の相貌と詩人の責務」では、イエイツが構想する自国アイルランドの姿を、彼の作品を精読して検証する過程に入る。

アイルランド自由国の成立とともに、イエイツは、上院議員として新生アイルランドの形をどう整えるかという課題に直接関与することになる。政治家イエイツの仕事としてコインの制定があるが、一見して連合王国のそれとは異なるデザインに彼の理想がうかがえる。君主も英雄もそこにはなく、民話伝説上の動物たちがあしらわれている。イエイツが、アイルランド全島で共通の伝説に基づき、宗教の差異を超え成立する共和国を望んだことが推察できる。

イエイツが現実に直面して、アイルランドという国をどのように評価し、どのように改めようとしたかを詳

らかにするため、イエイツの詩「市立美術館再訪」を取り上げて、彼がアイルランド島北部の長老派教会に所属する人々を疎外することに反対していたこと、新世代のアイルランド人を結ぶのは「土」であってカトリック信仰ではないこと、などを読みとろうと試みた。とはいえ、イエイツの主張を逆転させたものがアイルランド自由国の現実であり、自由国の要職が、イエイツがケルト論を立てたときから警戒し続けてきた教育のある、都会育ちの、カトリックの中産階級の民族主義者たちに握られた結果を示している。

したがって、イエイツは、詩人という立場から果たそうとした立法者としての責務を十分に果たせなかった、というのが第三章前半の主旨になる。しかし、次代のアイルランドのために、詩の中にイエイツが正統と考える人々の姿を残したことも重要であって、読まれ歌われ続けてアイデアが現出することを、イエイツが、復活祭蜂起の例から学んで忘れていなかった証左、と指摘した。

第三章の後半も、イエイツの詩作品を取り上げて、現実のアイルランドに対する彼の危惧と希望を検証している。取り上げる作品は「学童に交わりて」であり、問題とするのはカトリック教会と教育との関係である。視学官としてイエイツが訪れた学校がよりどころとするモンテソーリの教育メソッドが宗教教育を含んでいる点に着目して、結婚をはじめ個人の内面にまで関与し始めた当時のカトリック教会とアイルランド自由国との結びつきがある限り、教会が神と国家を後ろ盾にして子どもたちにとって逃れ得ない学校という共同体の是を支配し、彼らを操ってしまうのではないかと、というイエイツの危惧と、肉体にもとづく知恵によってその是に打ち克って欲しいという望みを、読みとろうとした。生長の過程で当然のものとして共同体の神話が身に染み込む。ユナイテッド・アイリッシュメン以来の悲願である統一アイルランドにあくまでも忠実なイエイツが、その実現のためには、共同体の神話に無批判に添おうとする自分自身からの自由が肝要であると認知していたことを、「学童に交わりて」が示している。

第四章では「イエイツを継ぐ者」として最初にポール・マルドゥーンを取り上げている。長老派教会とカトリック教会が共同体の中核をなし、その神話が日常的に支配力を持つ北アイルランドで、彼は多様な視点と声を操る話術を示した。「むき出しの事実」を重視し、あえてそれらに脈絡をつけず、つけたとしてもひとつの物語として完成させるには死角が多い極私的な視点から描写する。このようなマルドゥーンの詩学の意義が、「私は幾つもの声を操る」を徹底させて「幾つもの声のなかに私が消える」とき明白になる、というのが要点である。マルドゥーンは、幾多の神話に誘導される自己の仕組みを暴き、自己と信じてきたものからの解放を果たす。北アイルランドにおいて、この、個人をからめとる共同体の神話から自由を得る術を実作によって提示した意義は大きい、とした。大作『マドック：ある謎 (Madoc: A Mystery)』に現れる加害者としての自覚もこの延長にある。アメリカにところを移せば、アイルランド人もまた啓蒙する側としてネイティブ・アメリカンを抑圧してきたのであり、西洋の学とそれによって成る自己という知性体に無批判でいることの危険を指摘した。

第四章「イエイツを継ぐ者」で二番目に、このマルドゥーンがさかんに英語訳を試みるアイルランド語詩人ヌーアラ・ニ・ゴーノルの世界を取り上げている。わずかに生き残ったアイルランド語の世界から発せられた彼女の原詩とマルドゥーンの英語訳とを逐語的に対照して、彼女の世界においては、語りかける相手である「あなた」の実存が確保されていて、これは、たしかな物語りの場が、語り手と聞き手との間に共有されているから、と結論づけた。他者に語りかける力は、望ましい聞き手・読者の像が互いに異なる無数の物語の存在を前提にするマルドゥーンの世界では、どうしても弱くなる。このように資質が異なる両者の共同作業が成り立つのは、イエイツ同様、言葉を詩の形にして残すことに希望を見出すから、と説明した。

第四章で扱った三人目の詩人はポーラ・ミーハンである。彼女の詩法は、ニュー・クリティシズムの影響を受けたアメリカの創作文教室で学んだことから、作品の創造主であると同時にそれについての全責任を負う力を訓練によって陶冶することが可能で、詩は共有可能な知の技法たりうるのだという確信に裏打ちされている点に意義がある、と主張した。この確信に基づいて、彼女は、市井の片隅に生きる者の視座を堅持しつつ、アイルランド自由国の是の検証や女性性や神の読みなおしを行なっている、と説いた。

第五章「シェイマス・ヒーニーの沼沢詩編をめぐる」では、ヒーニーの初期作品である沼沢詩編、とりわけ「血の絆」に焦点をあてて論じた。

イングランドからの独立を人々が希求していた時代、イエイツの心にわだかまっていたのは、対イングランドという類型的な思考で自己を規定して疑わない精神であった。その後アイルランド自由国が成立したものの、対イングランドが対プロテスタントに変わっただけで、アイルランドの北部地方をアイルランドから疎外するという点で、類型化は悪化したとさえ言えた。このイエイツの危惧がもっとも先鋭的に日常の現実となっている地域が、ベルファスト周辺であった。

北アイルランドに生まれ育ち、イエイツが予測した最も困難な課題に真正面から取り組んだという点で、また、後輩詩人たちとイエイツを結んだという点で、際立った地位を占めるヒーニーの詩学は、文化的伝統の中に自らを位置づけるための神話と個人の内面をより深く省察するための神話との間で揺れ動く点に特徴があるが、さらに重要な特質が、それらの神話の完成を直前で妨げようとする身体に根ざした衝動、非論理的な叫びにある、と論証した。

終章「綴りかえる詩人たち」では、序章の提題を第一章から第四章まで考察してきた結果を総合して、以下のように論文全体を結論づけた。すなわち、アイルランドは物語の国、言説の国である。宗派の異同、暮らし振りのそれ、すべてが求心的な語りを持ち、人々を支配している。イエイツと彼に続くアイルランドの詩人たちは、この、身体に取り込まれた言説から自己を解放することの重要性を感知し、その最初の行動である破壊を敢えて行う勇気を持ち、支配的な言説の所在を平静に分析し、自立しつつも連帯し、連帯しつつもあくまで自律的に、もうひとつの物語を提示するための労を厭わない。共同体とかかわりつつ詩作することを通して、国のかたちの描き変えに参加しているのが彼らなのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、歴史上、さまざまな観点から語られてきた類型的なアイルランド観を概観し、類型的なアイルランド観を乗り越えて新しいアイルランドの国の形を再構築することを目指す代表的な現代詩人たちの成果と実態と意義を解明することに成功した力作である。

まず、序章において論者は、基本的な作業仮説を設定することを試みている。中世以来、近現代に至るまで貴族、僧侶、文人、政治家、詩人、あるいは批評家などによって語られてきたアイルランド観は、一方で、イングランドによる軽蔑をともなった言説によって、他方で、アイルランドによる憎悪をともなった言説によって、輪郭を与えられるに至る。このような二項対立思考という歴史的な呪いに縛られた結果、双方が容認できるアイルランド観を得ることが不可能になったのである。本論における論者の基本的な狙いは、このように相対立する二つの陣営のそれぞれ歴史的に構築してきたアイルランド観の境界を組み替えることによって、すなわち新しいアイルランドの物語を作ることによって、旧来のアイルランド観を改めることが可能となるということを実証することである。実証の方法として、論者は、アイルランド観を構築するための根拠となるアイルランド性という曖昧な概念を疑いながら、伝説と歴史とを照合し、様々なアイルランド観の構築の根拠とされてきた文学者や詩人たちの文化的影響力がどのようなものを改めてその著作に密着して厳密に考察することを提案している。以上のような作業仮説と実証方法は、今日の学界の新しい動向を反映した刺激的な仮説であり、着実に成果が見込める適切な方法であると認められる。

第1章では、シェイマス・ディーンが大部なアイルランド著作集『フィールド・デイ・アンソロジー・オヴ・アイリッシュ・ライティング』を編集して出版したのは、アイルランドが中世以来、文化的に多様であるという歴史的な事実を啓蒙することにより旧来の二項対立的なアイルランド観を乗り越えることにあったことを説得的に論証している。

第2章では、アイルランドの詩人W. B. イエイツのアイルランド観が再検討されている。イエイツのアイ

ランド観はさまざまな方面から批判の対象となってきた。特に彼のケルト論は今日に至るまでアイルランド観をめぐる言説に大きく影響を与えてきた。他方、イエイツのケルト論自体は、大英帝国を代表する詩人であり高名な批判家であり、かつオックスフォード大学の権威ある詩学教授であったマシュー・アーノルドが展開したきわめて恣意的なケルト観への批判的な反応という性格を持っており、論者によれば、この恣意性にイエイツがどう反応したかを吟味することにより、伝統的に構築されたアイルランド観の再構築の仕組みの現場に立ち会うことができるとされる。イエイツは、アーノルドのアイルランド観を論駁する過程で、イングランド側からではなくアイルランド側からケルトを主体的に語る方法として、「始原性」や「古代宗教」という概念を編み出し、「ケルト復興」運動の推進に寄与したのである。他方、イエイツは、必ずしもアーノルドのアイルランド観のすべてを批判したわけではないことを論者は力説する。1798年のユナイテッド・アイリッシュメンの武装蜂起に潜在する暴力的な民族主義運動を危惧するアーノルドの融和主義的な態度に共鳴する若きイエイツの姿に、論者はアイルランド自由国に引き継がれた暴力的な民族主義運動の傾向を批判する後年のイエイツの融和主義的な態度の萌芽を見ようとしている。イエイツのアーノルド観のもつ多面性を的確に洞察した論者のこの解釈は、とても説得力があり、示唆に富んでいる。

第3章では、イエイツの詩作品に見られるアイルランド観が検討される。論者によれば、上院議員に選出された詩人イエイツにとって、1922年に成立したアイルランド自由国の形をどう整えるかは極めて現実的な課題となった。イエイツの詩「市立美術館再訪」には、アイルランド自由国の暫定政権が、党派的宗派的に閉じられた言説しか許容しないことへの憂慮がうかがえるのである。皮肉なことに閉鎖的な言説が自由国を支配することになった独立後のアイルランドの現状への批判が顕著であるとされる。人々の自由を侵すのは植民地宗主国ばかりではない。国内に存在する強烈なカトリック支配体制も、人の魂を植民地化する。このような前提のもとに、論者は、イエイツの詩「学童に交わりて」を、独立後のアイルランドの不自由な社会的現実のコンテクストに位置づけて読み直し、そこに新しく誕生した国家の上院議員としてのイエイツの言いようのない不安を読み込んでいる。イエイツの詩を同時代の社会的コンテクストに位置づけて読み直す論者の試みは成功しており、極めて注目に値する。

第4章では、ポール・マルドゥーンPaul Muldoonの詩学が論じられる。彼の詩の特徴は、公共のものとされる言説を自己の内部を構成するひとつひとつの部分としてとらえ直して提示する点にある。この詩学は、アイルランドの負の歴史が刻まれた北アイルランドの政治文化を分析し克服しようとするとき、きわめて重要な意味を持つとされる。なぜならそれは個人をからめとる意味の編み目からの自由を獲得させ、同時に自立した個となることを可能にするからである。本章では、このほかに、マルドゥーンが盛んに英語訳を試みるアイルランド語詩人ヌーアラ・ニ・ゴernalNuala Ni Ghunnaの詩が論じられている。百数十年の昔に失われてしまったアイルランド語の伝承歌の世界を甦らせることに献身する彼女にマルドゥーンが協力を惜しまないのは、アイルランドという同じ空間にあり得たかもしれない別の言語による語りかけの魅力に憧れるからである。アイルランド語に堪能な論者は、ニ・ゴernalによるアイルランド語の詩とマルドゥーンの英訳とを比較しながら、両者が読者像において基本的に異なっていることを見事に実証し、結論として言葉への信頼と期待を詩にするという姿勢をふたりが共有していることを共感的に力説している。更に、この章では、ポーラ・ミーハンPaula Meehanの詩学の特質が論証される。彼女は、語り手である一人称の「私」を操作しながら、国家主義へと傾きがちがったかつてのアイルランド自由国をめぐる神話を脱構築し、神や女性性の読み直しを行ったことが鋭く指摘されている。

第5章では、シェイマス・ヒーニーSeamus Heaneyの詩学の特質が論じられる。ヒーニーの詩には、歴史的文化的伝統と個人の内面というふたつの方向への神話化の傾向が認められるが、彼の詩の最も重要な特質は、これらの神話化の完成を直前で妨げようとする身体に根ざした衝動や非論理的な叫びにあくまでも忠実であろうとする姿勢にあることが、説得的に検証されている。

終章では、これらのアイルランド詩人たち（W. B. イエイツ、ポール・マルドゥーン、ヌーアラ・ニ・ゴernal）

ナル、ポーラ・ミーハン、シェイマス・ヒーニー）がいずれも、自由を求めて、不自由な現実挑むように作品を書いたことが強調される。この場合「自由」とは二つのことを意味する。一方でそれは、植民地宗主国からの政治的な解放を意味する。他方で、アイルランド観をめぐる旧来の言説から自己を解放することを意味するとされる。結論として論者は、これらのアイルランド詩人たちは、立場は異なるが、共通に、旧来のアイルランド観を冷静に分析し、自立しつつも連帯し、連帯しつつも自律しながら、もうひとつ別の新しいアイルランド観を提示し続けたと強調している。このような現代アイルランド詩人観は論者の独創であり、学界への大きな貢献であると認められる。副論文は、アーノルドの国家よりもむしろ個人を重視するリベラル・ヒューマニズムを論じたものである。参考論文は、イエイツの言う文化の統一を念頭において書かれたもので、二項対立的思考が、ヨーロッパの長い歴史に照らせば必ずしも共同体の是非を決める正当な考え方ではなかったことが論証されている。いずれも主論文を生む契機となった論考で、論者の近年の関心が一貫して個人と国家共同体との間の緊張関係にあることを窺わせ、主論文を理解するのに欠かせない重要な労作であると認められる。